

4日、設営された診療テント内で、患者に医薬品の説明をする日本の緊急援助隊の女性隊員(右奥)ら。インドネシア西スマトラ州パダンパリアマン(共同)



日本の医療支援本格化

【パダンパリアマン共同】9月30日

に起きたインドネシア・スマトラ島沖地震の被災地、西スマトラ州で、日本の医療関係者による被災者への医療支援活動が本格化した。政府の緊急援助隊が診療用テントを設営、非政府組織(NGO)が移動診療に取り組むなど、4日までに計数百人の患者を診た。地震による重傷者は400人以上に上り、「日本の医療」への現地の期待は高い。

日本各地の医師や看護師らで構成する緊急援助隊の医療チーム計25人は2〜3日に同州入りした。2日に重傷者を治療したのを皮切りに、4日までに183人を診療。同日には震源に近い同州パダンパリアマンに診療用テントを設営、被災者が行列をつくった。

国際医療ボランティアAMDAも日

スマトラ沖地震 AMDA移動診療

本人の医師ら2人を含む10人で活動。4日には車2台による移動診療を行い、約200人の患者を診た。国際緊急援助隊の調査チームとして現地入りした自衛隊の医官ら約10人も、パダン周辺の都市で医療活動を実施。

AMDAメンバーで岡山市の医師津曲兼司さん(52)は「高熱症状や肺炎の子ども、原因がはっきりしない体の不調を訴えるようになった人が目立つ」と語る。

緊急援助隊医療チームのテントで診察を待っていたハムザルさん(75)は「倒れてきた柱に当たり、頭にけがをしたが、近所に医師はおらず、保健所の看護師にばんそうこうを張ってもらっただけだ。日本の医師に診てもらいたい」と話した。